

縁の下の力持ち



夏休みの学校は、とても静かです。いつもなら子供たちの元気な声が響く廊下にも、今は人影がありません。

そんな夏休みのある日(8月13日執筆)。校舎に入ると、廊下の床がいつも以上に光っていることに気がきました。専用の機械を使ってワックスをかけた床は、窓から差し込む光が映るほど、ピカピカに磨き上げられています。この床をきれいにしてくださったのは、用務主事さんでした。白いセンターラインのテープも事務職員や補佐をしてくださってる職員が張り替えてくださいました。子供たちがいない夏休みだからこそできる仕事があります。床を磨き、校舎を整える。外に出れば、暑い日差しの中、伸びた駐車場の草を刈る姿もあります。2学期に子供たちや教職員が気持ちよく過ごせるように。誰も見ていないところでも、黙々と汗を流してくださっています。子供たちの姿がない夏休みも、学校はたくさんの人に支えられ、動いています。

そんな校舎を見ながら、この夏の高校野球の話題になったある高校のことが思い浮かびました。

地方予選を勝ち抜き、甲子園への切符をつかんだ学校。アルプススタンドには、ベンチ入りできなかった野球部員たちの姿がありました。その中に、両手に白いバットングラブをはめた部員がいました。しかし、彼がその手で握っていたのは、バットではありません。太鼓のバチでした。グラウンドに立つ仲間へ声援を届けるために、懸命に太鼓をたたいていたのです。同じ野球部員です。きっと、自分もあのグラウンドに立ち、バットを握りたかったことでしょう。それでも、自分が今いる場所で、自分にできることを精いっぱいやり、仲間を支える。地方大会で優勝を決めた後、その監督は、ベンチ入りできなくてもチームを支え続けた3年生たちに目を向けました。そして、「連覇の要因は君たちです」と伝えました。監督自身も、その高校の野球部員だった高校時代、3年間一度もベンチ入りすることができなかったそうです。だからこそ、知っているのかもしれませんが。チームをつくっているのは、スポットライトを浴びる人だけではないということを。グラウンドで白球を追う人がいる。ベンチから仲間を励ます人がいる。そして、アルプススタンドで太鼓のバチを握る人がいる。立つ場所や役割は違っても、それぞれが自分にできることをする。その一つ一つが重なって、「チーム」になるのだということを、思います。



学校も同じです。教室で子供たちと向き合う先生がいます。そして、廊下の床を磨く人がいる。駐車場の草を刈る人がいる。学校の事務を支える人がいる。給食を作ってくださる調理員の方々がいる。放課後には、子供たちが遊ぶ様子を見守ってくださる方々がいる。さまざまな仕事で教育活動を支えてくださる人がいます。ふだん、子供たちからは見えない仕事もたくさんあります。けれど、見えないところで誰かのために汗を流してくださる人がいるからこそ、学校の日常は成り立っています。

そして今、子供たちはそれぞれの家庭や地域で夏休みを過ごしています。そこにもまた、子供たちのことを想い、見守り、支えてくださっている方々がいます。学校も、家庭も、地域も、きっと同じです。それぞれの場所で、それぞれの役割を果たし、誰かが誰かを支え、そして自分もまた、誰かに支えられている。



夏休みも、残り2週間となりました。ピカピカに磨かれたこの廊下を、子供たちが歩く日がやってきます。「おはようございます!」そんな元気な声が再び学校に響く日を楽しみにしています。

2学期も、子供たちを真ん中に、教職員、保護者、地域の皆様、一人一人の力が響き合う、「響き合い、支え合う学校」をみんなでつくっていきたいと思います。そのためには、まず私たち大人が、子供たちを支えるとともに、人と人をつないでいく存在でありたい。

見えないところで学校を支えてくださる「縁の下の力持ち」への感謝を忘れず、私自身も、子供と子供、子供と大人、学校と家庭、そして地域との「縁をつなぐ力持ち」になりたいと思います。

そして子供たちにも、いつか誰かに支えられていることに気づき、自分もまた誰かを支えられる人に育ってほしい。夏休みの静かな校舎で輝く廊下が、そんな大切なことを教えてくれました。